

「三焦」

大友 一 夫

はじめに

疎食を食らい、水を飲む。

やがてそれらは、大小便と化けて出る。

同じ中味なら、糞食らえ、ということになるろう。やはり古代人も、食べたものが血や肉や活動力になることを知っていた。最も驚くべき事は、水穀が、血に変化することを、古代人が何故知っていたかという事実である。血を滴るような肉を食らわずとも、疎食を食らって、血ができる。この大発見者は、きっと疎食を楽しんでいた人であったらうと思われる。

血は赤ん坊にもある。先天的に具有するのみであるなら、毎月、経水がでたら、貧血してしまうはずである。瀉血などもできなかったはずである。何故、出血しても、元に戻ることができるのか？

合理的な中国人は、神が全くの精霊のみでもって血を再生するとは思わなかった。血が体内で一定の量を保つためには、やはり、後天的な補充も必要であった。それが水穀であるとみなしていたのである。

それでは、どのような過程を経て、血に変化するのであろうか？或いは、汗や小便に変化するのであろうか？

水穀の通り道を、上から辿ってゆくと、一本の管腔で連なっている。血や汗や小便が出来るためには、大便になる通路以外に、別のルートがなければならない。どこかで水穀の精微が吸収されているはずである。

それらを吸収する場所はどこであるのか？

内経の解剖学

三焦の実体については、古今、様々な憶測がなされており、漠としてとらえどころがない。難経以後はもっぱら、有名無形のものとして扱っており、傷寒論も同様な見解を示している。形に関しては、現代中医学もその域を出ない。

ところが、三焦の出典とも思える内経を読むと、形あるものと見なしていたことが歴然としてくる。

素問、靈蘭秘典論篇にいう。

「心 者 君主之官也 神明出焉

肺 者	相傳之官	治節出焉
肝	將軍	謀慮
胆	中正	決斷
膾中	臣使	喜樂
脾胃	倉廩	五味
大腸	伝道	変化
小腸	受盛	化物
腎	作強	伎巧
三焦	決瀆	水道
膀胱	州都	津液藏焉
氣化則能出矣」		

この一文は、人体を国家に例えて、各々の臓腑の働きを述べたものである。

三焦の働きは、決瀆の官に例えられるという。“瀆”とは、みぞとか大川のことであり、“決瀆”とは、みぞを開いて水を通す、或いは水利を通ずることであり、云わば当時の運河の役割になぞらえたものと思われる。

ところでこの文章から伺われることは、膾中と三焦以外は、すべて、現存する形有る臓腑である。素問靈樞の臓腑を論ずる部分では、必ず他と対比させつゝ、各々の臓腑に対等の立場を与えている。従って具体的な臓腑が出てくる中で、いきなり、抽象的な臓腑が登場することは考え難いことなのである。

それを示唆する文章は、まだ沢山ある。例えば、素問、六節藏象論篇にいう。

「脾胃、大腸、小腸、三焦、膀胱者、倉廩之本、營之居也、名曰器」

又、五臓別論篇にいう。

「夫、胃、大腸、小腸、三焦、膀胱、此五者、天氣之所生也」

又、靈樞、本藏篇でもいう。

「黄帝曰、願聞六府之応、岐伯答曰、

肺合大腸、大腸者、皮其応

心 小腸、小腸、脉

肝 胆、胆、筋

脾 胃、胃、肉

腎 三焦膀胱、三焦膀胱、理毫毛其応」

内経の医学は、決して抽象に始まって抽象に終わっているのではない。その哲理は、自然界の事実と照らし合わせて構築されたといってよい。人体に関する事実、やはり先ず解剖である。

靈樞経水篇に

「天至高、不可度、地至広、不可量、」

「且夫人生於天地之間、六合之内、此天之高、地之広也、非人力之所能度量而至也」

とあるように、天や地が測り難いように、天地の間にあって、東西南北上下の内に位置している人体も、窮め尽くすことはとうてい困難であるとしながらも、

「若夫八尺之士、皮肉在此、外可度量、切循而得之、其死可解剖而視之」

と説き、八尺の人体、皮肉が事実ここに在る限り、外から測ることもできるし、手で按じて確かめることもできる。もし死ねば、これを解剖して視ることもできるとして、とらえ得る限りの事実は、決しておろそかにしていない。それは、今様の科学的態度と軌を一にするものである。

それでは、素問靈樞が、今様の科学のように事実の羅列のみかという、もちろんそうではない。事実の向こうに真理を觀ようとする觀点がある。

その辺の事情に関しては、素問、八正神明論篇に詳しい。

即ちいう

「觀其冥冥」

「通於無窮」と。

百姓が、天候の変化、農作業の時期を機敏に察知する能力や、職人の神技に通ずるものがあるが、これらの言葉は熟読玩味する要がある。

いずれにしても、内経の時代には、解剖は、医学的認識の基本であったと思われる。恐らく近世以上に解剖は頻回に行われ、追試され、場合によっては、暗黒の時代に、生体解剖も行われていたかもしれない。

事実、中国の解剖学は、脈論と共に、西方に紹介されており、ルネッサンス以前の西洋の解剖学を凌駕しているところをみれば、古代世界の解剖学に少なからぬ影響力を持っていたと推察される。

### 三焦の形

三焦はやはり、実体あるものとしてとらえた方が自然である。

それを示唆する文章はまだある。

即ち、靈樞、論勇篇にいう。

「勇士者、目深以固、長衝直揚、三焦理横、其心端直、其肝大以堅……」

「怯士者、目大而不減、陰陽相失、其焦理縦、髀髀短而小、肝系緩……」

これは、勇者と臆病者を比較した論であるが、ここでは、目や眉毛、心臓や肝臓、胆のう、胃腸の形を論じている。三焦に関しても同様で、理、即ち、きめや、あや、又は文理が臆病者と勇者では、縦横の違いがあることを明らかにしている。文理があるということは、当然形を意識している。

又、靈樞・本藏篇にいう。

「密理厚皮者、三焦膀胱厚  
粗理薄皮者、三焦膀胱薄  
疎腠理者、三焦膀胱緩  
皮急而無毫毛者、三焦膀胱急  
毫毛美而粗者、三焦膀胱直  
稀毫毛者、三焦膀胱結也」

ここでも先ず、三焦と膀胱は対等に扱われている。膀胱だけ具体的臓腑で三焦が抽象的臓腑とは考え難い。更にこの文章は、皮毛の状態と、三焦膀胱の状態を比較している。例えば、きめ細かで皮膚の厚いものは、三焦膀胱も厚いのだという具合である。厚い、薄い、或は弛緩していたり、緊張しているということは、当然、形の状態を示している。

その他にも、靈樞・張論篇にいう。

「三焦張者、氣滿於皮膚中」

ここでも、他の臓腑の“張”の病態と対比して書かれており、やはり、三焦という実体があるからこそ、このような表現が生まれてくるものと思われる。

又、靈樞・師伝篇にいう。

「鼻柱中央起、三焦約」

即ち、鼻柱の中央が突起しているものは、三焦がしまっていると。

難經以降、三焦は、名ありて形無しとする説が大勢を占めているが、中には、三焦有形論を唱える人もいた。

或る人は、それを脂膜といい、又或る人は、油膜とみなしていた。

陳無擇は

「有脂膜如掌大、正与膀胱相对、有二白脉自中出、夾脊而上、貫于腦」といい、唐宗海の「血證論」を注釈した秦伯末は、動物を解剖した上で、

「三焦古作膂、即人身上下内外相聯之油膜也、唐宗人不知膂形、以為有名而無象、不知內經明言焦理縱者、焦理橫者、焦有文理……西洋医書、斥中国不知人有連網、言人入水入胃、即滲出走連網而下、以滲至膀胱、膀胱上口、即在連網中也」

として、声を大にして有形論を唱えている。

これを抄訳するならば、以下の如くである。

“三焦の焦とは、昔は月へんの膂のことを指していた。即ち、体の上下内外に連絡している油膜のことである。唐や宗の人は、膂の形を知らない。そのために、名は有って形は無いとしたのである。黄帝内經では、はっきりと、焦の文理が縦であるとか、横であるとか明言しているではないか、焦には文理があるのである。どうして形が無いと言えるのだろうか。西洋の医学書は、中国の考えに目を呉れないので、人に連網があることを知らない。今、はっきり言おう。人が水を飲めば、その水は胃に入り、滲液が出て、連網を走って下る。そうして滲液は膀胱に至るのである。膀胱の上部は、まさに連網の

中にある。”

彼らの論が当を得ているかどうかは別にして、何か膜状のものを想定していたのは、確かである。

ここで“三焦”の語源に関する論究を余儀なくされる。

#### “焦”の意味

“三焦”の“三”は、上焦、中焦、下焦の三つを表しているとみてほぼ間違いはないであろう。しかし“焦”字は難解である。

ちなみに大漢和辞典では、以下の如く解説されている。

- (1) こげる、こがす、焼けて黒くなる。また 焦、𤇀、𤇁、に作り、𤇂、𤇃 に作る。
- (2) こげ臭い
- (3) あぶる
- (4) かわく
- (5) こげ色、黄黒色
- (6) 思いわづらう、なやみ苦しむ、いらだつ、思いこがれる。
- (7) やつれる、顛頓、  
焦、顛、焦、焦に通ず。
- (8) 焦明は鳥の名、鷦に通ず。
- (9) 焦門は地名、譙に通ず。
- (10) 国の名、周の初封の国。
- (11) 姓
- (12) 釜の一種、鑪に通ず。

これを見る限り、“焦”字は、水というより火に関係しているように思える。形あるものならば、釜のようなものであろうか？

しかし、上記“……に通ず”とあるように何かの略字とも考えられる。

事実、靈樞・背腧篇では奇異な文章にぶつかる。即ち、

「肺腧在三焦之間、心腧在五焦之間、膈腧在七焦之間、肝腧在九焦之間、脾腧在十一焦之間、腎腧在十四焦之間」とある。

この“焦”は脊椎又は肋骨を表しており、これは“𩑦”（あばらと解釈されている。但し、あばらは十二ヶしかないが……）字の略字とみなすのが妥当である。

又、秦伯末もいっているように、“焦”は“𩑦”字の略字とも解釈されている。

そこで、“焦”の入っている文字を、別表1のように列記し、“焦”が醸し出す雰囲気

つかんでみようを試みた。

この表を見るとわかるように「うれえる」とか「やつれる」という意味を示す文字はあるが、意外と「こげる」意味合いの文字は多くない。その反面、「生<sup>きあき</sup>臬」とか「拭う」といった「布」に関する文字がいくつかみられる。又、「布」で「酒をこす」という文字も多く、「酒」とも関係しているようである。

この中で最も複雑な文字である「𩇛」「𩇜」は、“しょう”ではなく“しゅう”と発音し、たばねる、堅くしぼる、集める等の意味を持ち、「集」字に通じている。

ところで、藤堂明保氏の「漢字語源辞典」によれば、“焦”は、周秦漢の上古の時代には、“tsiöŋ”と発音し、鳥をあぶってチリチリと縮まることを意味していたと解釈している。そして音韻からみた同義語として、「秋」「穠」「揪」「曾」「酒」「搯」「𩇛」「𩇜」「茜」「就」「脩」「修」「羞」「愁」「感」「戚」「蹙」「寂」「宿」「拊」「縮」「夙」「肅」「嘯」「蕭」「啾」「秀」「叟」「洩」「瘦」「艘」「嫂」を挙げ、各々、しぼる、ちぢむ、ほそいという共通の意味があることを明らかにしている。よく考えれば、“焦”は「焦点」の“焦”でもある。

この中で「曾」は、「酒」字の原字であり、「繹酒（しぼり酒）」を意味し、貯蔵壺から汁の出る姿を示しているという。＜呂覽、仲冬＞にいう「乃命大曾」の注釈に、「大曾とは酒官なり、米麴を？醸して化熟せしむ」とある。又、「酒」の解説に、「酉とは就（しぼ）るなり、八月、禾成りて酎酒を為（つく）るべし」＜説文＞とある。又、「洩」はしぼり汁のことであり、米を発酵させてしぼり、汁をとると酒となるから「酒」と同系語であるとしている。それは又転じて、膀胱をしぼって出る尿のことをも指しているらしい。

以上を総合して、三焦の実体を思い浮かべるならば、醸成した米麴をしぼり、酒をつくる布状にものが想起されてくる。

### 三焦の位置

さて、次に三焦の位置について考察したい。

先ず、有名無形論の創始たる難経ではどのように解釈していたのであろうか。

難経三十一難で、三焦とは何物で、どこに位置しているのかという疑問に対して、

「三焦者、水穀之道路、気之所終始也」

と確認した上で、位置に関しては、

「上焦者、在心下下膈、在胃上口」

と明記している。又

「中焦者、在胃之脘」

「下焦者、当膀胱上口」

とある。

即ち、上焦、中焦、下焦とも、横隔膜下に存在するのである。

後世、上焦は横隔膜より上、中焦は横隔膜より下、臍まで、下焦は、臍から下というように、漠然としてとらえられてきたが、難経では三焦の形まで言及できなかったものの、その位置は、腹腔内に存在することを認めている。それはもちろん、内経を熟読すれば、当然の帰結である。

靈枢・経脈編は、十二経脈各々の始終及び病態を論じた章であるが、この中に、三焦の位置をうかがわせる数条がある。

即ち、順を追って引用するなら、先ず、

「肺手太陰之脈、起於中焦、下絡大腸、環循胃口、上膈属肺、從肺系横出腋下……」  
とある。太陰肺経の脈は、中焦に起こって、一端下がって大腸にまとい、再び胃口に戻ってから、横隔膜を貫いて肺に属するという。

次に、

「心主手厥陰心包絡之脈、起胃中、出属心包絡、下膈歴絡三焦……」  
とあるのは、厥陰心包絡の脈は、胸中に起こって心包に分布し、次いで横隔膜を下行して、三焦に次々に絡むというのである。ここに至って、三焦が横隔膜より下にあることが判明する。

更に、

「三焦手少陽之脈、起於小指次指端、上出兩指之間、循手表腕、出臂外兩骨之間、上貫肘、循臑外、上肩而交出足少陽之後、入缺盆、布膻中、散落心包、下膈、循属三焦……」  
とある。これは少陽三焦経の脈の走行を述べたもので、心包に絡んだ後は、横隔膜を下行して、三焦に分布するとしている。

三焦はやはり、腹腔内に存在することは、間違いのない事実であろう。それを確認するために、上焦、中焦、下焦の各々の具体的な位置を、靈枢・營衛生会篇から拾ってみよう。

「黄帝曰、願聞三焦之所出、岐伯答曰、上焦出於胃上口、竝咽以上、貫膈而布胃中、走腋、循太陰之分而行、還至陽明、上至舌、下足陽明……」

ここでは上焦は胃の上口から出る。難経の「在胃上口」に一致するわけである。ところで「竝咽以上」以下の文章を“上焦”を主語にすると、上焦は足まで通じていることになる。次の中焦の所で述べるように、ここは言外に、“上焦から出る気”を主語にしておく方が妥当であろう。即ち上焦から出た気は、“咽”（現在の食道）に並んで上行し、横隔膜を貫いて胸中に分布するというわけである。

中焦はどうかというと、

「黄帝曰、願聞中焦之所出、岐伯答曰、中焦亦並胃中、出上焦之後、此所受氣者、泌糟粕、蒸津液、化其精微、上注於肺脈、乃化而為血……」

とある。

中焦は、胃の中から、上焦と並んで出るが、上焦の後に位置している。ここから出た気は、糟粕（食べもののかす）を分離し、津液を蒸し出し、更に精微（エキス）と化して、上って肺脈に注ぎ、更にそれが化して血と為す、というものである。

更に下焦は、

「黄帝曰、願聞下焦之所出、岐伯答曰、下焦者別廻腸、注於膀胱、而滲入焉、故水穀者、常并居於胃中、成糟粕而俱下於大腸、而成下焦、滲而俱下、臍泌別汁、循下焦而滲入膀胱焉・・・・」

とある。

即ち下焦は廻腸から分かれて膀胱に注いでいる。廻腸とは現在の回腸そのものでなく、回腸と大腸の一部を指しているという説があるが、ここでは腸管全体というように解釈しておく。そしてその働きは、糟粕の中の水分を吸収して膀胱に注ぐのである。

以上、三焦の形、語源、位置に関し、古書に則って考察を加えてきたが、それらを整理すると、以下の如きものが想定されてくる。

胃からは、水穀の精微をしばらくとる二通りの布状のものが出ており、それが上焦と中焦を表している。

腸管からは、やがて小便となるような水分を吸収する布状のものが出ており、それを下焦と称している。

### 三焦の実体

三焦に恋い焦がれて推理を重ねてきたが、そろそろこの謎解きも終局を迎えたようである。読者も、千数百年にわたって、人を惑わし続けた罪で搜索されてきた真犯人が、そろそろ何者かが解ってきたのではないかと思う。

その通りである。

現代解剖学の俎上に“三焦”を載せるならば、その実体は、臓側腹膜 (Peritoneum viscerale) そのものである。(別表2、図1、2、3参照)

腹膜は、臓側腹膜と壁側腹膜に分けられ、又、位置的に、前壁、下壁、後壁に分けて論じられている。なお、後壁に関係する腹膜は殆ど、臓側腹膜である。後壁を大きく分類するならば、前胃間膜、後胃間膜、そして腸管と関係する小腸間膜、虫垂間膜、結腸間膜、直腸間膜である。

胃からは前胃間膜と後胃間膜が出て、胃横隔膜間膜で移行し合い、それらで囲まれた部分に網嚢という空間を形成する。

それらはちょうど、上焦と中焦の二つの焦が、胃から別れて出ながら、並んで上って膈を貫くということと対応している。又、後胃間膜は、一度下がって胃結腸間膜として大腸と結びつく。これはちょうど、中焦から起こる太陰肺経の脈が、一度下がって大腸に絡み、再び上って胃の上部に向かうことと一致している。

胃から出た各々の腹膜には、脈管が通っており、胃を栄養しているが、胃の粘膜からも、いくらかの水分、アルコール、グルコースが吸収され、それはこれらの脈管を通して運ばれる。古代人が三焦を見て、その働きを類推した時には、主にその後者、即ち、エキスを吸収する働きを重視したのであろう。

小腸間膜以下の腸管膜は、別図からもわかるように、なる程、腸管から水分をしぼりとっているようにみえる。又、これらの腸管膜は、後腹膜を介して、当然膀胱ともつながっている。

いわゆる尿生成の過程は、腎が関与するというより、下焦が主役を成していると古代人は考えていた。もちろん腎と膀胱を結ぶ尿管そのものも明視していたと思うが、むしろ同じように尿道から排泄される精液の通り道とみなしていたと考えるのが妥当である。

### 三焦の生理と病態

さて、三焦の最大の論点であった解剖に関しては、大筋の働きと合わせて結論を導き出したつもりである。その詳細な働きと病態に関しては、既に議論し尽くされていると思うので、以下に簡単に触れておきたい。

既に述べたように、三焦は決瀆の官に例えられ、水を運行する働きがある。水穀からしぼりとられるものは、汗や血や尿となり、それらの基本はやはり水である。三焦は腎に属し、腎は又肺に連なっているので、腎肺両臓を統率している。又、水道を通利するので膀胱にも属している。従って、或る意味で独立した腑ともいえる（靈樞・本輸篇）

水穀が胃に入ると、その精微は先ず上焦と中焦から出て五臓六腑を巡る（靈樞・五味篇）。その中でも上焦は、“開發”を主り、五穀の味を受け入れ（靈樞・五味論篇）、その精微を全身に行き渡らせる。上焦から出た気は、皮膚を熏じ、毛を潤すが、それはちょうど霧露のようである（靈樞・決氣篇）。或いは又肌肉を温め、骨節を養い、腠理に通っている（靈樞・癰疽篇）。その気は外邪から体を衛る気でもあり、素早くて、かつ滑らかである。（靈樞・營衛生会篇、靈樞・平人絶穀篇）。陽はもともと上焦でその気を受けているので、上焦が通じなくなると、寒邪が襲った場合には、皮肉を温めることができないので、寒慄を覚える。又、反対に、陽が盛んになった時、外熱を生ずるのも、やはり上焦が通じないために、腠理が閉じて、衛気が排泄することができなくなるからである。又、労倦し、形相衰え、食欲不振に陥るような陰虚内熱の症は、上焦が通じないと、下脘の働きも悪くなり、胃気が熱し、その熱が胸中に熏じるために発生する（素問・調經篇）。又、悲しむと気が消え入るのは、先ず心系がひきつり、肺葉が挙上するため、上焦が通じなくなり、營衛が巡らず、熱気が中にこもってしまうからである。更に恐れると気が下がるのは、先ず精気が退き、上焦が閉じると、気が発散できずに内にこもってしまうために、下焦が張ってくるからである（素問・挙痛論篇）。もし邪気が上焦に留まると、上焦が閉じて通じなくなる。この時、食や湯を摂ると、衛気が内に留まって、外に巡らなくなるため、急に眠くなってしまうのである。（靈樞・大惑論）。

中焦からは、水穀から吸収した精微が營気となって出て、それが肺脈に注いで、血に変化するのである（靈樞・營衛生会篇、靈樞・決氣篇）。その出方は、あたかも露のように孫

脈に滲み渡ってゆき、孫脈が血で満ちると、絡脈に注ぎ、絡脈も満ちると経脈に注がれる（靈樞・癰疽篇）。

素問靈樞では、中焦の病態に関しては詳しくない。わずかに靈樞・五味論篇で鹹味が中焦に入った場合、口渴を来すことが書かれてある。その他にあり得べき病態を考えるならば、造血に関与する物質はありながら、貧血を来している病気等が、中焦に起因しているのかもしれない。

下焦は、狭義の三焦を表している場合が多く、その働き及び病態を合わせて説明したい。

下焦は廻腸から糟粕を分離し、その汁を膀胱に注ぐのが主な働きである。

従ってその病態は、腹が張り、下腹が特に堅く、小便が出ないで、ひきつったようになる。更に水があふれてくると、腹が張って腹水を来す（靈樞・邪氣臟腑病形篇、素問・宣明五氣篇、靈樞・五癰津液別篇）。従って下腹部が痛んで腫れ、小便が出なかったら、それは邪が三焦（下焦）にあるとみてよい（靈樞・四時氣篇）。下焦（三焦）が実し過ぎると、小便が出なくなるが、逆に虚すと尿を漏らすようになる（靈樞・本論篇）。

その他、咳嗽や、嘔吐を来すものの中に、三焦が関与している場合がある（素問・欬論篇、靈樞・五味篇）。

なお、命門と三焦の働きを結びつけようとする説があるが、素問靈樞では全く無縁である。即ち靈樞・根結篇にあるように、

「太陽根於至陰、結於命門、命門者目也」として、命門はあくまで、太陽経の結ぶところ、即ち目であるとしている。靈樞・衛氣篇、素問・陰陽離合論篇でも、同様に明記している。

おわりに

三焦という真犯人をようやくこの手で捕らえたが、最早時効である。三焦が臓側腹膜だとしても、又、血や汗や尿に分離する大もとだとしても、傷寒論以後の臨床に役立つわけではない。恐らく、水の通利に関係する生薬の殆どが、三焦に帰経すると唱えても、かえって混乱を来すばかりである。

私はただ、素問靈樞の真意を知りたかっただけである。

そのために、他の解説書の殆どは目に入らず、ただこの原典に忠実であろうとした。恐らく、ものそのものを捕らえようとしたら、万の解釈書の引用も、徒勞と化すであろう。

ただただ、原典に記されている点と線をつなぎ合わせて、実体を掌中につかむことである。

それは、以前、肝と脾の実体を掌握した時にも、先ず難経に忠実であることから出発したことと同一観念に立つ。

肝が現在の肝臓と脾臓であり、脾は大網であるという説。これはあくまで解剖学的にあるが、素問靈樞でも決して矛盾するものではない。最近、中国で、脾の問題に関し、よ

うやく難経の臓腑の重量を論じた部分を取り上げ、現在の臓腑との比較検討がなされている。いわば古典の一つの問題点である肝と脾の実体についての研究が、今、端緒に就いたといつてよい。しかしまだまだそこを突破する事が出来ない。脾が脾臓なら重量が違いすぎる。脾が脾臓なら、重量が違うだけでなく、“散膏”という脂肪塊がない。経絡が左右にあることの説明が明解にできない。“扁”という程平べったくない。

これについて最近、新しい知見を得た。

藤堂明保氏の漢字語源辞典によれば「脾」は、卑、碑、俾、裨、髀、婢、稗、鞞、陣、裨、庫、辟、壁、璧、臂、嬖、避、僻、臂、譬、闢、擘、襞、癖、劈、平、萍、坪、并、併、餅、姘、駢、餅、屏、娉 等と同系列の文字であり、それらの共通の意味は、たいら、平面に並ぶというものである。

「脾」の解説には、「土の臓なり、肉+卑声」とある。「卑」は「裨」の原字であろうといわれ、「裨」は<説文>に「円榼（まるく平らな酒器）なり」とある。

「碑」は平らな石を立てたものである。

「屏」はついたてである。

「襞」は衣のヒダである。

思えば大網も、臓腑を被う壁のようなものである。

今回、三焦は臓側腹膜であると結論したが、大網も臓側腹膜の一つである。ただ、この大網は、他の腹膜と、形態上趣を異にしており、古代人は恐らく独立した臓腑と考えていたと思われる。

ところで、肝脾の論文を書いた時、私は一つ勇み足をした。それは、“筋”は筋肉ではなく、静脈ではないかと仮定したことである。その根拠は、江戸時代の書物中にある、三種の筋は、二つは脈管、一つは神経という一文にヒントを得て、肝の青（緑）と関連づけたのである。今思えば、筋は腱を指しているのであろう。その否定を確固としたのは、実は三焦を探究している内に、古典解明で残された最大の問題点である経絡が、脈管以外には考えられないという想念が、彷彿として湧いてきたためである。

いずれ明らかにする日が来よう。

恋い焦がれてやつれ果てる前に。

（この論文は、昭和 53 年 5 月、日本東洋医学会総会で発表した内容を書き留めたものである。）

表 1

熇：うれえる	}	やつれる
熇：うれいつかれる、やせる		
熇：やせる、縮む		
𤇀：うれえる	}	こげる
𤇁：うれえる		
熇：たいまつ、やく		
蕉：ばせう、あくた、たきぎ、くろい	}	生泉（きあさ）
𤇀：布の一種、未だ漚（ひた）さぬ生麻		
𤇁：あさたば、雨がちで麻がやぶれる、あつめる		
𤇂：布の属	}	拭う
𤇃：		
𤇄：えらぶ、推す	}	をこす、つきる、水がかかる、川の名
𤇅：		
𤇆：酒		
𤇇：		
𤇈：		
𤇉：	}	をのみほしてかへさない、つきる、まつる
𤇊：明察のさま、驚き恐れる		
𤇋：さわぎ働く	}	はしる
𤇌：たきぎ、きこり		
𤇍：いたむ、やぶれる、しかる		
𤇎：→ 𤇏（たばねる、つかねる、堅くしばる、あつめる、物をおさめたばねる）	}	ものみやぐら
𤇐：三足のなべ		
𤇑：みそさざい		
𤇒：こくたん		
𤇓：断つ		
𤇔：山のいただき		
𤇕：盗み視る		
𤇖：かくれ石		
𤇗：あばら		

表 2

<u>腹膜</u>	<u>三焦</u>
<u>前壁</u>	
<u>下壁</u>	「穀始入於胃、其精微者先出於胃之兩焦以溉五藏、別出兩行」
<u>後壁</u>	「上焦出胃上口竝咽以上貫膈」
A. <u>前胃間膜</u>	
1. 肝鎌狀間膜	
2. 肝三角間膜	
3. 小網	
肝十二指腸間膜	
肝胃間膜	
胃橫隔間膜	
B. <u>後胃間膜</u>	「中焦亦並胃中、出上焦之後」
1. 大網	「肺太陰之脈、起於中焦、下絡大腸、還循胃口、上膈」
2. 胃結腸間膜	
3. 胃脾間膜	
4. 胃橫隔間膜	
C. <u>小腸間膜</u>	「下焦者別迴腸、注於膀胱」
D. <u>虫垂間膜</u>	
E. <u>結腸間膜</u>	
F. <u>直腸間膜</u>	

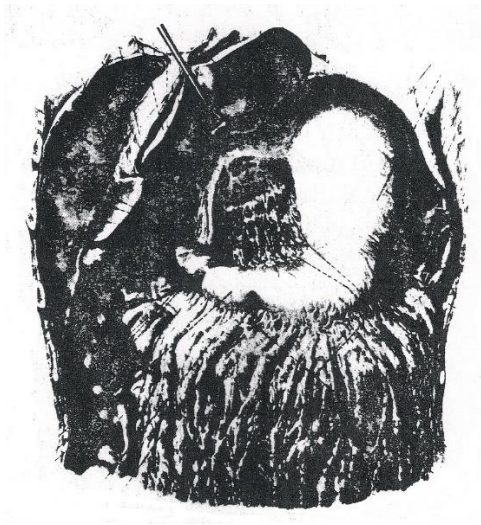


図 1. 腹部の諸内臓の位置を前方より検す  
(腺腹部；肝臓をひき上げてある)

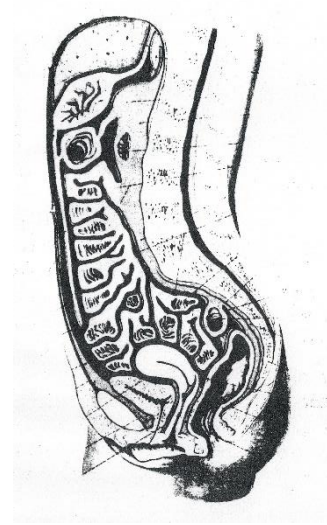


図 3. 腹部と骨盤部の正中断（なかば模型的）

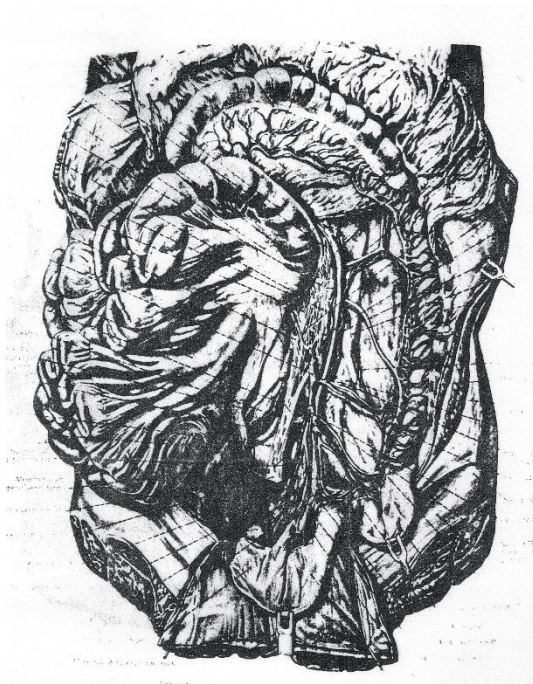


図 2. 大腸の腸間膜の血管と神経を剖出（左側）

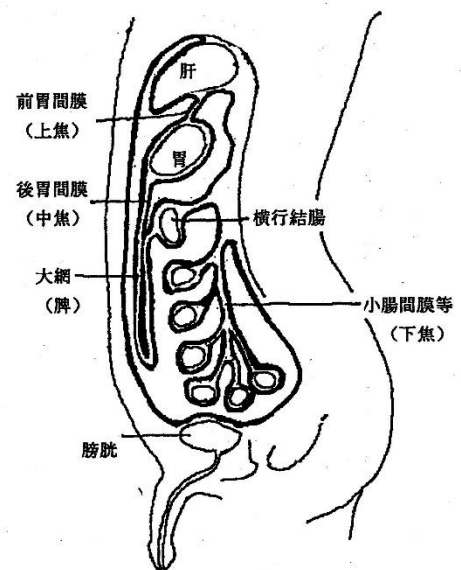


図 4. 図 3 をわかりやすくした図  
(康平傷寒論の研究Ⅲ 傷寒の身体から)